

---

# 悔いあらためよ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悔いあらためよ

### 【Nコード】

N6641K

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ゴンザレス神父は日本に来て彼から見て極めて異質でいい加減な宗教観に啞然とするが先輩のパヴァロツティ神父は至って落ち着いている。その理由は。日本人の宗教観を扱った作品です。

## 第一章

悔いあらためよ

ゴンザレス神父は日本に来ていた。それは仕事のうえで、である。まだ若く整った顔立ちをしている。黒い太い眉にダークブラウンの髪に高い鼻と彫のあり顔をしていて黒い目の光も強い。口元は引き締まっている。

背は高く均整のとれた体格をしている。姿勢もよく神父の服がよく似合っている。性格は至って真面目で熱心である。信仰心も学識も確かである。

彼は日本に来てだ。まず思ったことはだ。

「凄い国ですね」

「凄いですか」

「全くです」

こう同僚のパヴァロツティ神父に対して言うのである。その髭だらけの彼の顔を見ながらだ。この神父はゴンザレス神父と正反対に丸々と太って人なつつこい顔をしている中年の男である。

「いや、話には聞いていました」

「独自の文化を持っている国だと」

「箸ですか」

日本人が使うその食器のことだ。

「あの二本の棒を使って食べるのはです」

「もう慣れましたか？」

「赴任する前に練習をしていましたので」

真面目な彼らしい行動である。実際にそうしたのである。

「それでなのですが」

「それでもですか」

「その箸で色々なものを食べるのですね」

ゴンザレス神父が言うのはこのことだった。

「本当に。この前レストランで」

「どうされました？」

「スパゲティをです。その箸で食べている人がいました」  
いぶかしむ顔でパヴァロツティ神父に話す。

「普通はフォークですが」

「はい、それはその通りです」

パヴァロツティ神父もそのことに頷く。実際に今二人は自分達で作ったスパゲティを食べている。トマトと大蒜、それにシーフードのスパゲティである。当然オリーブはかなり使っている。

「現にこうして我々も」

「ですが箸で食べていたのです」

「それも日本の醤油や独自の食材を使ったスパゲティをですね」

「信じられません」

こう言うしかないゴンザレス神父だった。

「そんなパスタがありその食べ方も」

「ですから日本です」

「日本だからです」

「この国が独特なのはもう御存知の筈ですが」

「ええ、それは」

先の話の通りである。

「その通りですが」

「ではそういうことで」

「うつむ、しかし」

「やはり納得できませんか」

「正直に申し上げますと」

ゴンザレス神父は嘘をつくことが嫌いだった。何故かというと彼は神に仕えていると自覚しているからである。神の僕が嘘をついてはならないということだ。

「その通りです」

「そうですね。やはり」

「どうしても抵抗があります」

また言う彼だった。

「この国には」

「ははは、すぐに慣れます」

パウアロツティ神父は笑ってそのことを否定した。

「すぐにです」

「慣れますか」

「はい、慣れます」

まさにそうだといふのである。

「まあ毎日布教に出られますよね」

「既にそうさせてもらっています」

「ではすぐです」

「すぐですか」

「この国のことを知ればよくわかります」

まさにその通りだといふのである。

「すぐにです」

「ううむ、その言葉は御聞きしましたが」

「信じられませんか」

「申し訳ありません」

いぶかしむ顔での返答だった。

「どうしてもです」

「まあ日本という国をよく御覧になられるといいです」

パウアロツティ神父はその笑顔で彼に話すだけであった。

## 第二章

「色々なものがわかりますから」

「そういうものですか」

「確かにイタリアは最高です」

パヴァロツティ神父もイタリア人である。これはイタリア人として当然の言葉であった。それぞれの郷土への帰属心が強くともである。

「ですがこの国もです」

「いいというのですね」

「はい、イタリアと同じ位最高です」

神父ではあるが女を口説く言葉に近くなっていた。この辺りの言葉の使い方はやはりイタリア人であった。ただし話す方も聞く方もこのことは自覚していない。

「ですから」

「いいというのですね」

「はい、いい国ですから」

「確かに悪い国ではありません」

ゴンザレス神父もそのことは感じ取っていた。

「この国は」

「それはもうおわかりですね」

「雰囲気もいいですし」

「雰囲気はもう感じ取っているのだ。」

「それに」

「それにですか」

「人の顔も明るいです」

「その通りですね」

「しかし。それでも」

こう言って首を傾げ続けるゴンザレス神父だった。次の日二人は

揃って外に布教に出た。ここでゴンザレス神父がパヴァロツティ神父に対して言ってきた。

「あの」

「何か？」

「前から思っていたことですが」

怪訝な顔で彼に対して告げるのである。

「この国の信仰はどうなっているのでしょうか」

「信仰ですか」

「教会はそれなりに見ます」

流石にバチカンのお膝元であるイタリア程ではないにしろ、である。イタリア、それに欧州においてはキリスト教は絶対の存在である。それもかなりのものである。

「ですが」

「ですが？」

「他の宗教のものも多く見ます」

ここでは眉を顰めさせるのであった。

「まずはです」

「はい」

「あれですが」

ゴンザレス神父が顔を向けた先にあるのは寺であった。それであった。

そうして次はその寺の道路を挟んで向かい側に顔をやる。するとであった。

そこにあるのは神社である。その両方に顔をやっての言葉である。

「どう思われますか？」

「どうかとは」

「お寺は仏教のものですね」

「はい」

「そして神社は」

今度はゴンザレス神父自身が言った。

「日本独自の宗教、神道ですね」

「その通りです」

「一つの国に幾つ宗教があるのですか」

それを不思議に思っているのである。

「一体幾つなのでしょうか」

「幾つだとは」

「その仏教にしても無数の宗派がありますね」

「そうですね。それこそプロテスタントの宗派よりも多くあるかと」

カトリックはやはりローマ＝カトリックが頂点である。そこにまとまっていると言ってもいい。しかしプロテスタントは各宗派に分かれている。正教もそうだがここが大きな差なのだ。

そして日本の仏教もだ。そうなのである。

「それもわかりません」

「わかりませんか」

「神道にする信仰している神が多いですが」

「それは多神教ですの」

「ですね。ただ」

「ただ？」

またこう話が続いていく。

「ここまで様々な宗教が混在している国はありません」

「それがわかりませんか」

「本当にどうい国なのでしょう」

「年の終わりとはじめはもつと凄いですよ」

ここでパヴァロッティ神父はさらに言ってきた。



### 第三章

「もうね」

「さらにですか」

「そう、かなりです」

また言うのである。

「絶対に驚かれるかと」

「左様ですか」

「特にはじまりの日です」

「はじまりというと」

「一年のはじまりの日です」

その日が特にというのである。

「その日です」

「一体何があるのですか？」

「それはお楽しみに」

今はこう言って多くを語らないパヴァロツティ神父だった。

「是非共」

「楽しみにですか」

「面白いものが見られますので」

こうは言うが多くは言わないのであった。

「是非」

「わかりました」

こうやり取りをして年末を迎えた。するとまずは。

周りにはキリスト教一色になった。ツリーが飾られ話題もクリスマス  
スのことばかりである。ゴンザレス神父はこのことに感心すること  
しきりであった。

「これはいいことです」

「いいことだというのですね」

「日本人も神を信じているのですね」

満面の笑みでの言葉である。

「やはり」

「そうですね。信じていると思いますよ」

その彼に対するパヴァロツティ神父の言葉である。

「それは間違いありません」

「何か引つ掛かる物言いですね」

パヴァロツティ神父の言葉に顔を向ける。今二人はクリスマスのその街の中を歩いている。音楽はクリスマスを祝う歌ばかりだ。まさに神を祝福する中であつた。

その中で、である。ゴンザレス神父は言つのであつた。

「ここまで神を讃えているというのに」

「またわかりますよ」

しかしパヴァロツティ神父は笑顔でこつ返すだけである。

「やがて」

「やがて、ですか」

「まずはクリスマスは静かに楽しみましょう」

それはそのままだという。

「そして」

「そして？」

「一年の終わりと一年のはじまりを迎えましょう」

それもだという。

「それで宜しいでしょうか」

「ええ、それでは」

ここでゴンザレスはまた神の僕として応えるのだった。

「神を讃えるその言葉を聞いて」

「そうですね」

今ゴンザレス神父は喜んでいた。そのうえで聖夜を迎えた。二人の神父はその夜をワインとささやかな食べ物で質素に祝つた。そうして一年の最後の日の夜は。

また二人は外にいた。一年の最後の日の夜を二人で歩いていた。

これもパヴァロッティ神父の誘いである。ゴンザレス神父はこの夜は顔を顰めさせていた。

「あの」

「何か？」

「何なのですか、今日は」

「何なのかといわれますと」

「あのクリスマスまでは何だったのですか」

彼は顔を顰めさせてパヴァロッティ神父に問うていた。

「あの神を讃えていたのは」

「今は違うというのですね」

「この鐘の音は」

今夜の街に鐘の音が鳴り響いていた。しかしその鐘の音はゴンザレス神父が知っている鐘の音ではなかった。その鐘の音は。

「仏教の鐘の音ではありませんか」

「その通りです」

「何故急に仏教に!？」

彼は怪訝そのものの顔でパヴァロッティ神父に問うのだった。

## 第四章

「なつたのですか」

「一年の終わりです」

パヴァロツティ神父はその彼に対して答えてきた。

「その時に百八の煩悩を払うのです」

「心の中の苦しみをですか」

「そうです」

ゴンザレス神父も煩悩のことは知っていた。おおむねこう認識していた。それをパヴァロツティ神父は答えてみせたのである。二人の息が夜の闇の中で白い。

「その通りです」

「それは仏教ですね」

「はい、仰る通りです」

「間違いなく。しかし」

ここでまた言うゴンザレス神父だった。

「何が何なのかわかりません」

「急に仏教になつたことがですね」

「先日まであれ程神と主と聖霊を讃えていたのに」

こう言つて戸惑うことしきりだった。

「何故こうなるのか」

「それではですね」

「それでは？」

「明日ですが」

彼から話を進めてきた。

「明日のことですが」

「どうだというのですか？」

「また外に出ましよう」

こう彼に言つてきたのである。

「明日です」

「そうですか。明日ですか」

「そう、明日です」

また言うパヴァロッティ神父だった。

「明日また」

「わかりました」

話が全くわからなかったがその言葉に頷くのであった。

「明日ですね」

「今日はもう帰って寝ましょう」

「ええ、そうですね。何かさっぱりわかりませんが」

「また明日です」

一年の最後の日はこれで終わりであった。そしてその次の日、一年のあらたなはじまりの日である。外に出て向かった場所はある。

「「ゴゴ」は？」

「御存知ですね」

「神社ですね」

まずはこう返したゴンザレス神父だった。二人は神父の黒い服のままである。

「「ゴゴ」は」

「はい、そうですね」

「住吉大社ですか」

その神社の名前も知っていた。その広さはかなりのものである。

普段は静かな場所だがこの日だけは違っていた。至るところ人だらけで神社の外まで人だかりでこった返している。ツ二人も神父もその中にいた。ここでゴンザレス神父は驚く顔で言うのであった。

「昨日は仏教でしたね」

「そうですね」

「それで今日は神道ですか」

「それがどうかしましたか？」

「どうかしましたかではありませんよ」

ゴンザレス神父は首を傾げながら述べた。

「こんな滅茶苦茶な世界がありますか」

「信仰がですか」

「そうです。まずクリスマスまでは神の世界で」

「はい」

「しかし一年の最後は仏教で」

つい昨日の話である。

「そして今は神道だとは」

「それがどうかしましたか？」

「日本人の信仰はどうなっているのですか」

このことが不思議でならないのである。

「全くどうなっているのですか」

「見たままです」

しかしパヴァロツティ神父は穏やかな顔で言う。熱いまでの人高りの中だ。

「こうして今は一年のはじまりを祝っているのです」

「一年のはじまりを祝うのは主に対してだけです」

ゴンザレスは神社に向かう人々の中でキリストの話をした。

## 第五章

「それ以外の何に対しても」

「はい、神もおられますよ」

「えっ!？」

「ほら、あちらに」

その人だかりの中のある場所を指差すとである。そこにいたのは

「えっ!？」

「見えますね」

「あの」

ゴンザレス神父は今自分が見ているものを信じられなかった。何とそこにいるのは自分達と同じ信仰の人々だったからである。

「キリストは言われました」

「貧しき人は幸せであると」

「悔いあらためましょう」

こう言って神の教えを説いていたのである。しかも神社の敷地の中だけだ。

彼等は神社に向かう人達に対して神の道を説いていた。キリストの教えをである。

ゴンザレス神父もこのことには仰天した。そして思わず隣にいるパヴァロツティ神父に対して問い返したのである。

「あの、これは」

「見えますよね」

「何ですかあれは」

思わずこの言葉を言ってしまったのだった。

「ここは神社ですよね」

「はい、そうです」

「それでどうして」

啞然としたままの顔で話し続けるのだった。

「何故いるのですか」

「それが日本です」

「それがですか」

「はい、日本なのです」

こう笑って話すパヴァロツティ神父だった。

「おわかりになられましたか」

「いえ、それは」

ゴンザレス神父は真剣そのものの顔で語るのだった。

「宗教が違うではありませんか」

「はい、違いますね」

「他の国なら大変なことです」

ゴンザレス神父の生真面目な言葉は続く。

「それこそ何をされてもです」

「ここから叩き出されてもというのですね」

「イスラムのモスクで主の教えを説けば」

ゴンザレス神父はわかり易いように話した。ただしこれは自分自身にとってわかり易いようにという意味である。パヴァロツティ神父に対してではない。

「それこそ殴り倒されます」

「下手すれば殺されますね」

「それは覚悟しなければなりません」

そこまでだというのである。

「そうでなくともです」

「そうでなくともとは」

「カトリックの教会でプロテスタントの牧師が説法をすることも」

「有り得ませんね」

「考えられません。しかし今」

「ですが見て下さい」

ここでまた言ってきたパヴァロツティ神父であった。

「日本の人達を」



「な……」

ゴンザレス神父は彼等を見てまた驚くことになった。何と、であった。

誰もその説法をする彼等について何も驚かない。立ち止まって話を聞く者はいる。しかし止めたりしようとする者はいない。誰一人としてである。

「誰も何も」

「御覧になられましたね」

「止めないのですか」

「止める必要がないからです  
だからだというのだった。」

## 第六章

「ですから誰もです」

「止めないのねすね」

「その通りです。日本人の中では神は」

「神は？」

「確かに存在しています」

「キリスト教の神は、という意味である。」

「しかし仏も存在しています」

「仏もですか」

「そして神々もです」

「神道についてはこう表現したのであつた。」

「神々も同時に存在しているのです」

「神も仏も神々もですか」

「全て中に存在しています」

「全てだという。存在していると語るのである。」

「日本人の中にです」

「そうした存在は一つではないのですか」

「そうなのです。それはおわかりになられませんか」

「少しばかり、いえ」

「今度は自分の言葉を訂正することになった。」

「かなりというか全くです」

「おわかりになられませんか」

「だからキリスト教の祝いも仏教の行動もですか」

「そして神社にお参りにです」

「この三つが並存しているのだというのである。」

「他にも多くの宗教がこの国には存在していますよ」

「それだけではなくですか」

「他にもあります」

さらに話すパヴァロツティ神父だった。

「それが日本人なのです」

「神社の中で主の教えが説かれる」

またその彼等の方を見て言うゴンザレス神父だった。

「それが日本なのです」

「面白いと思われませんか？」

「わかりません」

まずはこう言うしかない彼だった。

「ですが」

「ですが？」

「どうやら私はかなり頑固だったようです」

自分を振り返っての言葉になっていた。

「ただ主と他の存在の対立ではなかったのですね」

「ははは、実は私もですね」

「パヴァロツティ神父もですか」

「はい、私も最初はそうでした」

こう自分のことも語るのだった。

「こんなおかしなことはないと思いました」

「左様でしたか」

「ですが今は違います」

「こうしたものを見てですか」

「彼等の中には多くの教えが共に存在しています」

「そうだとするのだる。」

「それが日本なのです」

「そうなのですか。それでは」

「おわかりになられましたね」

「ええ、今度なのですが」

言葉を前置きする。そのうえでの言葉だった。

「少しだけですが」

「左様ですか」

「面白いですね」

ゴンザレス神父の今の言葉はこうしたものだった。

「そうした考えも」

「どうでしょうか。それで」

パウアロツティ神父は笑いながらさらに話していく。

「これからですが」

「これから？」

「一緒に神社の中に入りませんか」

こう彼を誘ってきたのである。

「中にです」

「この神社の中にですか」

「これまた面白い場所です」

見ればその髭だらけの顔を屈託のないものにさせていた。そうしながらの言葉であつた。

「色々なものがあります」

「色々なですか」

「簡単に言えば日本があります」

「日本がですか」

「そうです、日本がです」

こうゴンザレス神父に話すのだった。

「日本があります」

「神道の日本ですね」

「そうです。それでどうされますか？」

「是非共」

ゴンザレス神父も笑顔で応える。

「そうさせてもらいます」

「そうですか。それでは今から」

「はい。しかしですね」

ここでゴンザレス神父がまた首を傾げさせて言ってきた。

「私達にしてもです」

「私達も？」

「こうして一緒にいますが」

こうパヴァロツティ神父に話すのだった。

「誰も何も言いませんね」

「私達に対してもそうですね」

「ええ」

それを聞いて返すパヴァロツティ神父だった。

「それはそうですね」

「同じですね。やはり日本では」

「宗教が違うからといってそれでどうこうされはしません」

「いいことですね」

ゴンザレス神父は微笑んで述べた。

「それもまた」

「そういうことです。それでは今から」

「行きましょう」

こうして二人はそのまま神社の中へと入って行った。周りの人達は何も言わずそのまま行くことができた。そうして日本をそこに見るのであった。日本のその姿をだ。

悔いあらためよ

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6641k/>

---

悔いあらためよ

2010年10月8日15時07分発行